

第四五四回 一〇月二六日(火)

## 古典ヒンドウ教文献にみえる女性

東洋文庫研究員 原 實  
国際仏教学大学院大学学長

古代インドの宗教の中で一般に革新的、進歩的と言われる仏教の經典にも『五障三従』『變成男子』など男尊女卑の言辭が見えるが、これら女性蔑視の思想は仏教の淵源する古代インド文化に由来するものであるうか。事実『三従』はマヌ法典に見え、又『性転換』によつて女性が男性となり初めて所期の目的を果したとなす物語モチーフも叙事詩に見える。女性を称揚し、就中貞女の徳を讃える章句も少なしとしないが、古代インドの典籍には概して『男尊女卑』の傾向が顕著で、それを伺わせる概念を幾つか列挙する事も可能である。

(1) 古代インドに顕著な通過儀礼 (samskara) は男子のみ規定され、女性は結婚して夫に奉仕して初めて浄化される (samskara) と考えられていた。又、女性にとつて固有の積善の道はなく、ひたすら夫に奉仕して彼の修めた功德の半分を受けると言われる。

(2) 女子は結婚して夫と共に伝統的祭式を行う伴侶となり

(saha-dharma-carini)、夫に奉仕するを旨とし、男子を産む事が期待された。もと、人間に生まれながらにして三つの負債 (ra-tra-ya) ありと信じられ、その中の『祖先』への負債は息子を産む事によつて返済される。息子が祖先祭 (śrāddha) を行つて父祖の死後の安泰を保証した故である。

(3) 娘はこれに反して祭式執行の資格なく、しかも父親は娘を結婚させる義務を負っていたから、娘の誕生は父親にとつて頭痛の種 (Krecha) と言われた。

(4) 男子には再婚が許されても、原則として女子にそれは許されなかつた。既述のように古代インドの結婚は祭式執行の『伴侶』(saha-dharma-carini) を得るためであつたから、妻が死ぬと夫は再婚して今一度『祭火』を灯すを義務とした故である。逆に女子には夫死して共に生きながら火葬の薪に臥すとす習慣 (Sati: 貞女の鑑) があつた。

(5) 梵文戯曲に於いては、身分教養の高い男性は梵語 (Samskrit) を語るが、王妃、王女を初めとして女子は、原則として教養身分の低い男性と同様に、皆文法構造の単純な『俗語』(Prakrit) を語る。宗教文献ではしばしば女性と奴隷は同一位に置かれている。

これらインドの女性観の一面を、妻の務め、娘の地位を

端的に物語る叙事詩マハーバーラタの一節（1.1457）を  
翻訳しながら解説する。その物語の骨子は次の如くである。  
妻と二人の子（娘と息子）を抱えるバラモン一家に不幸  
が訪れる。人食鬼が家族の中から一人を犠牲に供しなければ、  
一家を皆殺しにするというのである。四人の中から誰  
を出すか、思案に暮れたバラモンは自分が犠牲になって人  
食鬼の許に赴こうと決心する。これを見た妻は既に男子を  
産み、夫に奉仕してこの世の義務を果たしたので、自分が  
身代わりになろうと言う。それを耳にした娘は、自分こそ  
不要の存在、進んで一家の危機を救おうと申し出る。